

沖繩防衛局が沖繩本島北部にある米海兵隊北部訓練場のヘリコプター着陸帯建設のため、資機材を基地内に搬入したのだ。地元住民らの根強い反対で停滞している懸案の工事である。

翁長知事は同日夜、記者会見し「用意周到にこの日を待っていたというのが見え見えで、到底容認できない」と批判した。沖繩以外の地域ではほとんど報じられていないこうした動きを捉え、

「翁長知事が反発するのは当然」と語るのは東京大学大学院教授で哲学者の高橋哲哉氏だ。

米軍属事件に抗議する6月19日の県民大会。登壇した大学生の玉城愛さんは「安倍晋三さん、日本本土にお住まいの皆さん。今回の事件の第二の加害者は誰ですか？ あなたたちです。しっかりと沖繩に向き合っていただけませんか」と訴えた。高橋氏はこの場面を心に刻み、こう確信した。

「本土のわれわれからすると非常にきつい言葉ですが、沖繩の人々の感覚からすれば、やはりこの言葉が当を得ているんだと思います」

本土の有権者の責任

基地問題に関する政府対応に、沖繩の人々が怒りをあらわにする状況が重ねて報じられる中で

胸の内をそう推し量る。

「冷遇」の理由の一つは、2012年の自民党総裁選にさかのぼる。小池氏は当初、安倍晋三氏を支援していたが、途中から優勢とみられた石破茂氏の支持に回った。かつては「初の女性総理」の呼び声もあったが、第2次安倍政権の発足以降、またつた役職には就いていない。

ある政治ジャーナリストは、今回の都知事選の戦いぶりを、「自民党を敵に見立て、そこに挑む姿を見せることで支持を得ようとしている。『自民党をぶっ壊す』と叫んだ小泉純一郎元首相と重なる。メディア戦略がうまく、まるで『女小泉』だ」と評する。

小池氏は会見で自民党の候補者擁立プロセスを「どこで何を決めているか不透明」と批判。提出した推薦依頼を取り下げると、続けて谷垣禎一党幹事長に進退の意向を伝えた。就任直後に都議会を解散する考えがあることも表明。矢継ぎ早の演出で、敵との駆け引きをメディアに巧みに取り上げさせている。

一方、自民党都連会長代行の下村博文氏は、こうした小池氏の動きに疑問を投げかける。「離党や除名などの処分も覚悟で出馬したいということだと思いが、進退の判断を幹事長に預けてしまい、覚悟が本物かどうか

なお、安倍政権を選挙で大勝させる。その当事者はほかでもない、本土の有権者だ。高橋氏はきっぱり言う。

「これまで沖繩に基地を集中させる政治体制を支えてきた責任は、本土の有権者の側にあるのです」

今回の参院選で、現政権に異議を申し立てる民意を示したのは沖繩だけではない。

東北6選挙区は、与党が東日本大震災で大きな被害を受けた岩手、宮城、福島県の3県を落とすなど、1勝5敗の惨敗を喫した。特に注目されるのは、東京電力福島第一原発事故の影響が続く福島選挙区（改選数1）の現職閣僚の岩城光英法相が、野党統一候補で民進党の増子輝彦氏に僅差で敗れたことだ。

ただ、地域別の得票率を見ると、複雑な内実も浮かぶ。岩城氏は沿岸部の全自治体で優勢だった。原発事故の被害を最も受けた双葉郡では内閣部も岩城氏が制し、川内村ではほぼダブルスコアで引き離れた。

世代別では、岩城氏は10〜50代の全世代を制した一方、増子氏が上回ったのは60代、70代のみだった。

こうしたデータを示した立命館大学衣笠総合研究機構准教授の開沼博氏は、

「復興に一定のめどがついた地域」と「高齢者」が、現職大臣の落選に影響を与えたことが見えてきます」と指摘する。

都知事選スタート

大波乱の〴〵人気投票

保守が分裂した一方、野党4党は告示直前に統一候補を担いだ。有力3候補の選挙戦は、違和感と不安だらけだ。

元日本弁護士連合会会長の宇都宮健児氏(69)の決断で、東京都知事選の構図が固まった。

「保守が分裂した今回は都政を変えたいチャンス。そういう状況を生かすためには、私が出馬を



東京一極集中への警鐘を鳴らした書籍がベストセラーになった増田寛也氏(左)、自民党との対立を演出して注目を集める小池百合子氏(中)、「究極の後出しじゃんけん」と一部で批判がある鳥越俊太郎氏(右)。選挙戦では、メディアへの露出の仕方も重要になる

かわからない。選挙だけ考えたら「悲劇のヒロイン」のストーリーは一部成功しているのだから、知事になった後の都政運営も考えているのか。都民から選ばれた都議会を冒頭解散することはありえない」

支援者になじみがない

下村氏によると党内では、小池氏が推薦依頼を取り下げなければ、同様に推薦依頼を出していた増田氏と政策を論じ合う立会演説会などの場を設け、候補者を決める考えもあったという。「小池さんと増田さんでオーブ

岩城氏は12日の閣議後の記者会見で、参院選の野党共闘について「安倍政権を打倒する」という意味での野党共闘だった。福島に限って言えばそれなりの成果をあげた」と振り返った。前出の高橋氏はこう話す。

「沖繩、福島両県は、国の政策によって今、最も厳しい状況に置かれた地域です。そうした地域で現職閣僚が落選したことは、安倍政権の政治に対する根本的な批判を明示しています」

取り下げることの影響を与えようんじゃないかと考えている」

宇都宮氏は立候補辞退の理由をこう語った。この会見が行われたのは、告示日前日の7月13日夜。都知事選はこうして、元防衛相の小池百合子衆院議員(64)、元総務相の増田寛也氏(64)の保守系2氏に、ジャーナリストで野党4党が推薦する鳥越俊太郎氏(76)を加えた3氏を中心に争われることになった。

告示前の序盤戦で、話題をさらったのは小池氏だった。

自民党都連は6月末、都知事

「問題提起した人間として、中に入って解決するのがけじめ」(7月13日の候補者共同記者会見) などと語っている。

また、前出の永田町関係者はこんな見方を示す。

「増田さんは若手県元の元知事で、東京とは関係のない人物。都民や自民党の支援者にとってはなじみがなく、『よそ者』と感じていると思う。一方で支援者にとっては、東京選出の国会議員である小池さんこそ、自民党の候補だと映るのではないか」

都知事選は参院選直後の夏の選挙でもあり、自民党が強みとする組織の動員力についても、「1カ月に2度も選挙があれば力が入らない」(同前)

ただ一人政治経験なし

知名度でまさる小池氏に有利とみられる状況を覆したのが、鳥越氏だった。

「敵は自民党だけと思っていた小池さんにとって、鳥越さんの出馬は想定外だっただろう。無党派層の支持という面で、鳥越さんと小池さんは競合する」(前出の政治ジャーナリスト)

人気投票に陥りがちな都知事選で有利とされる。後出しじゃんけんを制した鳥越氏。ただ準備不足は明らかで、7月12日に行われた出馬会見でも「公約はこれから考える」と語った。

参院選と同じ10日に投票票された鹿兒島県知事選でも、脱原発を唱えた野党系候補が自民、公明両党の支援を得た現職を破り、初当選を果たした。

アベノミクスの恩恵を実感できない農村部は、TPPへの反発も根強い。地方では従来の保守層の液状化も浮かぶ。与党批判の受け皿にとどまらない、信頼に足る対案を打ち出せる野党勢力の確立が急務だ。

編集部 渡辺 豪

が2代続けてカネをめぐって途中辞職したため、政治家でなく、実務家を候補者に選ぶ方針を固めた。小池氏は「がけから飛び降りる覚悟で挑戦したい」と立候補を表明。その会見があったのは、都連会長の石原伸晃氏が前総務事務次官の桜井俊氏に出馬を要請した日だった。

まるで『女小泉』

「安倍政権のもとで冷遇されていると感じていたと思う。活躍の場がほしかったんだろう」

小池氏を知る永田町関係者は、

4度のがん手術を克服した一方、4年後の東京五輪・パラリンピックは80歳で迎えるため、健康不安を指摘する声もある。また、有力3候補のなかではただ一人、政治経験がない。

民進党都議の浅野克彦氏は、都知事の資質を、こう考える。「都には4人の副知事がいて、政策を実現する多くの優秀な職員もいる。都知事に最も必要なのは大局観だと思う。ぶれずに方針を示すことができるかどうか求められる」

鳥越氏は出馬の動機について参院選で改選勢力が3分の2に達したことへの懸念を挙げた。

前出の下村氏は、

「国政の課題を都知事選に反映させることには違和感がある。安倍政権の政策は、参院選で国民の審判を受けたはずだ」と話す。一方、浅野氏は地方議員の立場からこう見る。

「国から交付金をもらっていないのは、国に言うべきことを言える立場にある。一つの勢力が衆参両院で3分の2を占め、都知事までも同じ考え方になったら、国民の多様な声は国政に反映されるのか。鳥越さんの問題意識はここにあると思う。しかし、都知事選で最初に語るべき論点でない。偏りがあれば、僕も意見していきたい」

編集部 宮下直之